

## (b) 海域

浦添市が行った土質調査（ボーリング調査）の調査結果は、表 3.2.112 に示すとおりである。

調査地点付近は、島軸付近の標高120mの首里台地から西へ一段と低い台地を経て、調査地点付近で沖積低地及び海岸のサンゴ礁地へと続いている。地質的には、調査地を含む沖縄島中南部一帯は、新第三紀中新世から第四紀更新世最下部にかけて堆積した島尻層群泥岩・砂岩を基盤として、第四紀更新世の琉球石灰岩層及び完新世堆積物と続く地質層である。

また、海域は、海岸線には沖側へ続く板状の「板干瀬」の分布も認められる浅海域となっており、サンゴ礁地形として特徴付けられる。干潮時には調査地一帯がほぼ干上がることにより礁原が広く発達する。

表 3.2.112 土質調査結果（調査地域の地盤構成）

地質時代	地質名	土質名	記号	N 値	記 事		
第 四 紀	完 新 世	沖積層		砂 礫	Ag	6～ 貫入不能	造礁性サンゴやその他の生物起源の石灰質碎屑角礫～砂主体。所々、塊状のサンゴ岩塊が分布する。
	更 新 世	琉球層群	琉球石灰岩 (岩 塊)	DLS	—	主に固結した砂質石灰岩。短棒～棒状に採取される。	
琉球石灰岩 (砂 礫)	DLg		3～ 貫入不能	主に未固結の角礫～砂状を呈する砂質石灰岩。所々、固結した石灰岩が短棒～棒状コアで採取される。			

出典：「平成16年度 那覇港浦添ふ頭地区公有水面埋立事業(その1)土質調査委託報告書」  
(平成17年2月、浦添市)

## ウ) 貴重な地形・地質の状況

「第3回自然環境保全基礎調査 自然景観資源調査報告書（沖縄県）」（1989年、環境庁）にて、「視対象である自然景観の骨格をなす地形・地質及び自然景観として認識される自然現象」を対象として、自然景観資源の位置及び特性等が調査されている。

関係3市には表 3.2.113 及び図 3.2.45 に示すとおり、海成段丘の自然景観資源があり、海岸部を除くほぼ全域に広がっている。

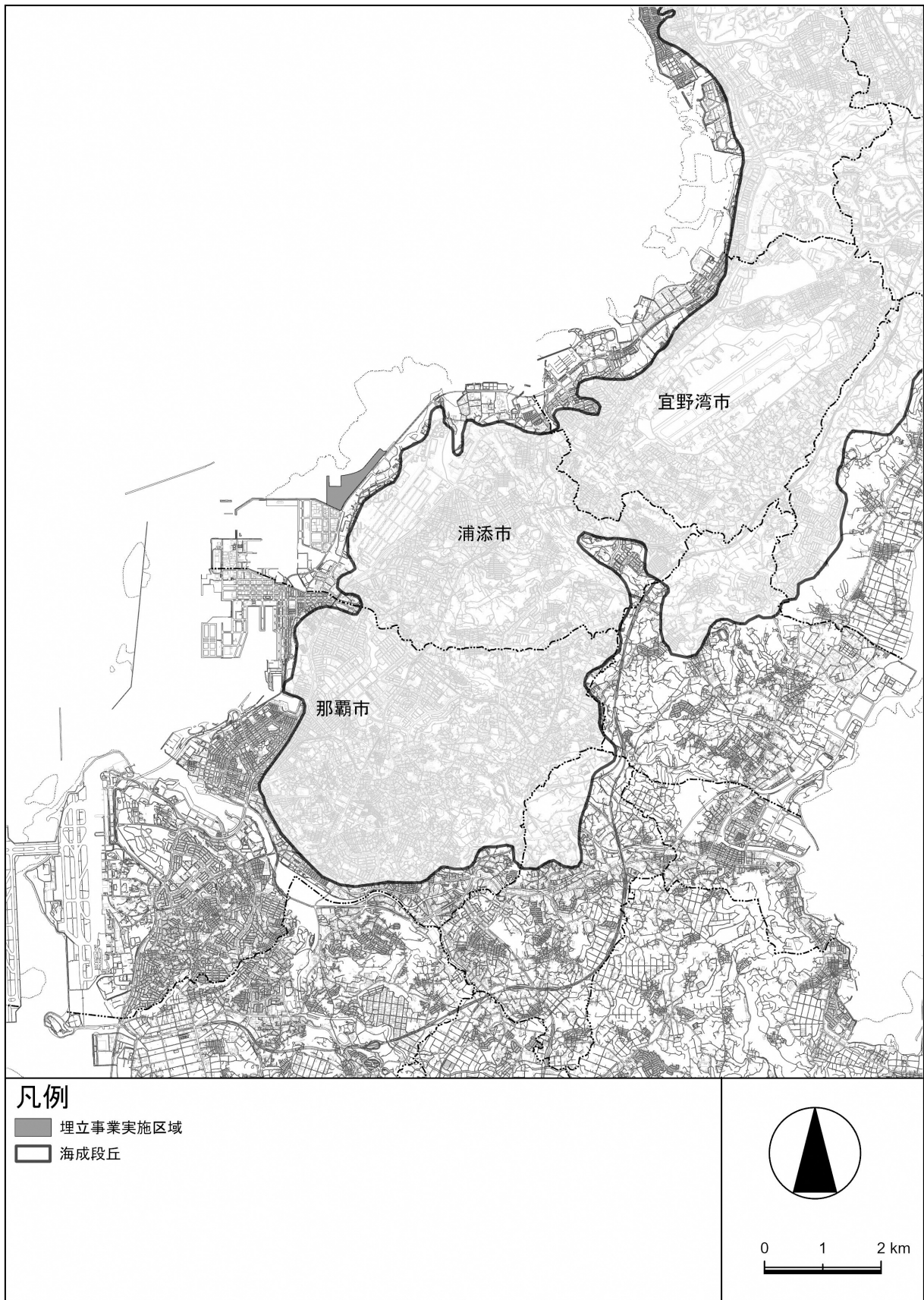
表 3.2.113 自然景観資源

資源名	名称	特性
海成段丘	—	—

出典：「第3回自然環境保全基礎調査 自然景観資源調査報告書（沖縄県）」  
(平成元年、環境省生物多様性センター)

[https://www.biodic.go.jp/reports2/3rd/joho/joho\\_47/3\\_joho\\_47.pdf](https://www.biodic.go.jp/reports2/3rd/joho/joho_47/3_joho_47.pdf)

注：表中の—は、特に名称等が定められていないことを示す。



出典：「第3回自然環境保全基礎調査 自然景観資源調査報告書（沖縄県）」（平成元年、環境省生物多様性センター）<https://www.biodic.go.jp/reports2/3rd/joho/index.html>

図 3.2.45 注目すべき地形・地質の分布状況

(イ) 既存の現地調査

ア) 調査概要

調査概要は、表 3.2.114 及び表 3.2.115 に、調査位置は図 3.2.47 に示すとおりである。

測量調査は、砂浜の現況地形及びその季節変化を把握することを目的に、縦断測量及び横断測量を実施し、結果を縦断図、横断図、地盤高平面図及び等高線図にとりまとめた。

表 3.2.114 既存の現地調査の概要（地形）

調査項目	地形の状況、重要な地形の状況
実施機関	浦添市土地開発公社
報告書名	那覇港浦添ふ頭コースタルリゾート地区環境影響評価調査（現地調査）業務委託報告書
調査時期	平成26年6月13日、16日、7月14日、8月21日、9月22日
調査位置	図 3.2.46に示す浦添ふ頭地区リーフ内及びその周辺
調査方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>●地形の状況 埋立事業実施区域及びその周辺において、干潮時における岩礁の露出状況等について記録した。</li> <li>●重要な地形の状況 埋立事業実施区域及びその周辺において、重要な地形として、ビーチロック、波食棚、ノッチ等の分布状況を把握した。</li> </ul>

表 3.2.115 既存の現地調査の概要（測量調査）

調査項目	測量調査
実施機関	浦添市土地開発公社
報告書名	那覇港浦添ふ頭コースタルリゾート地区環境影響評価調査（現地調査）業務委託報告書
調査時期	春季：平成26年3月18日～5月1日 秋季：平成26年11月1～21日
調査位置	図 3.2.47に示す砂浜箇所及び周辺。
調査方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>●縦断測量 砂浜箇所及び周辺において、海岸線形状に応じて20m間隔測点（中心点）の中心線を設定（中心線測量）し、各測点について水準測量を行った。結果は縦断図にとりまとめた。</li> <li>●横断測量 設定した20m間隔の各中心点において沖向きに横断測線を設定し、5m間隔測点及び変化点を原則に水準測量を行った。各横断測線長は30mを原則とし、砂質干潟が30m以上にわたる場合は、沖向きに適宜延長した。結果は横断図、地盤高平面図、等高線図にとりまとめた。</li> </ul>

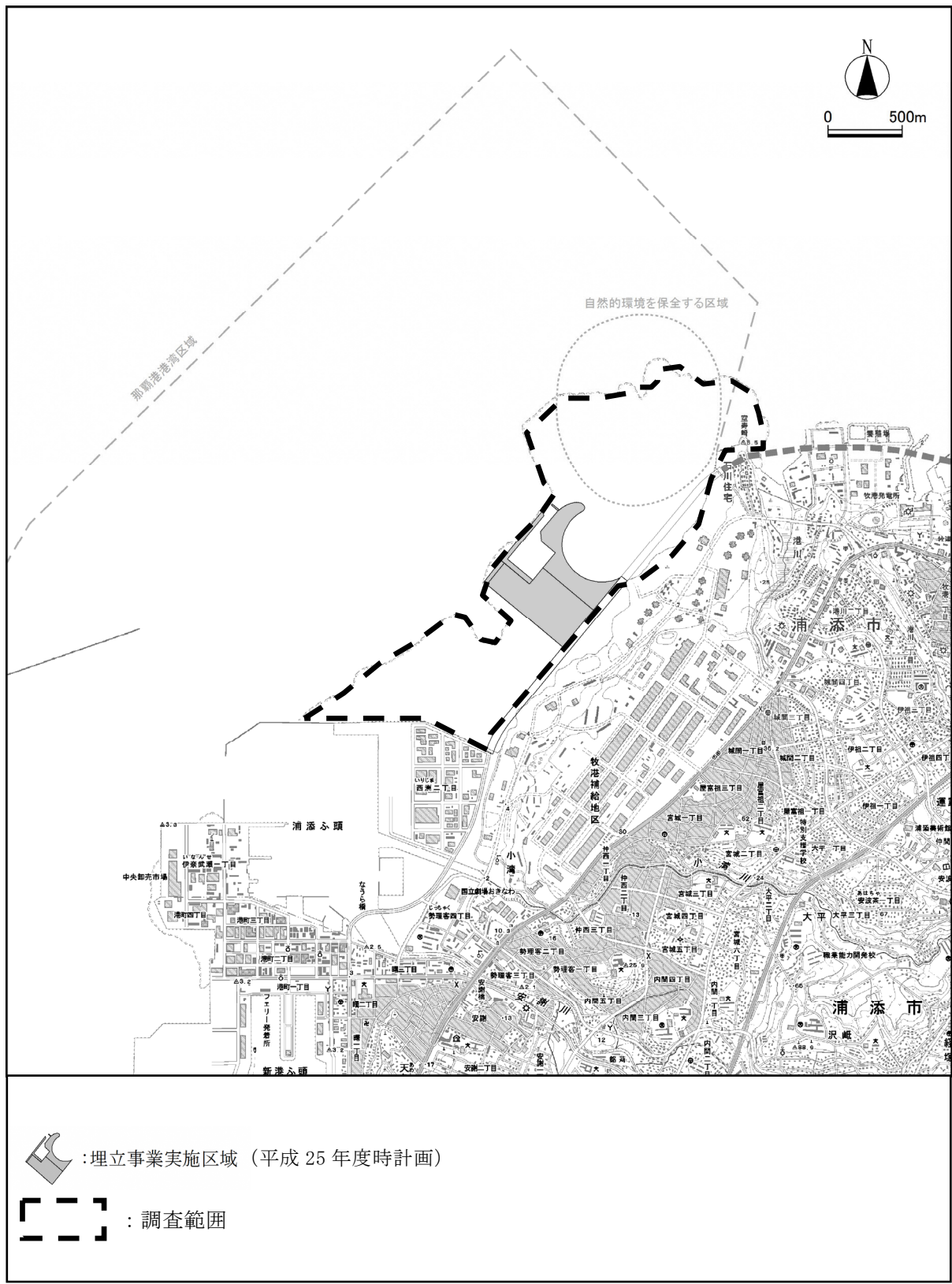
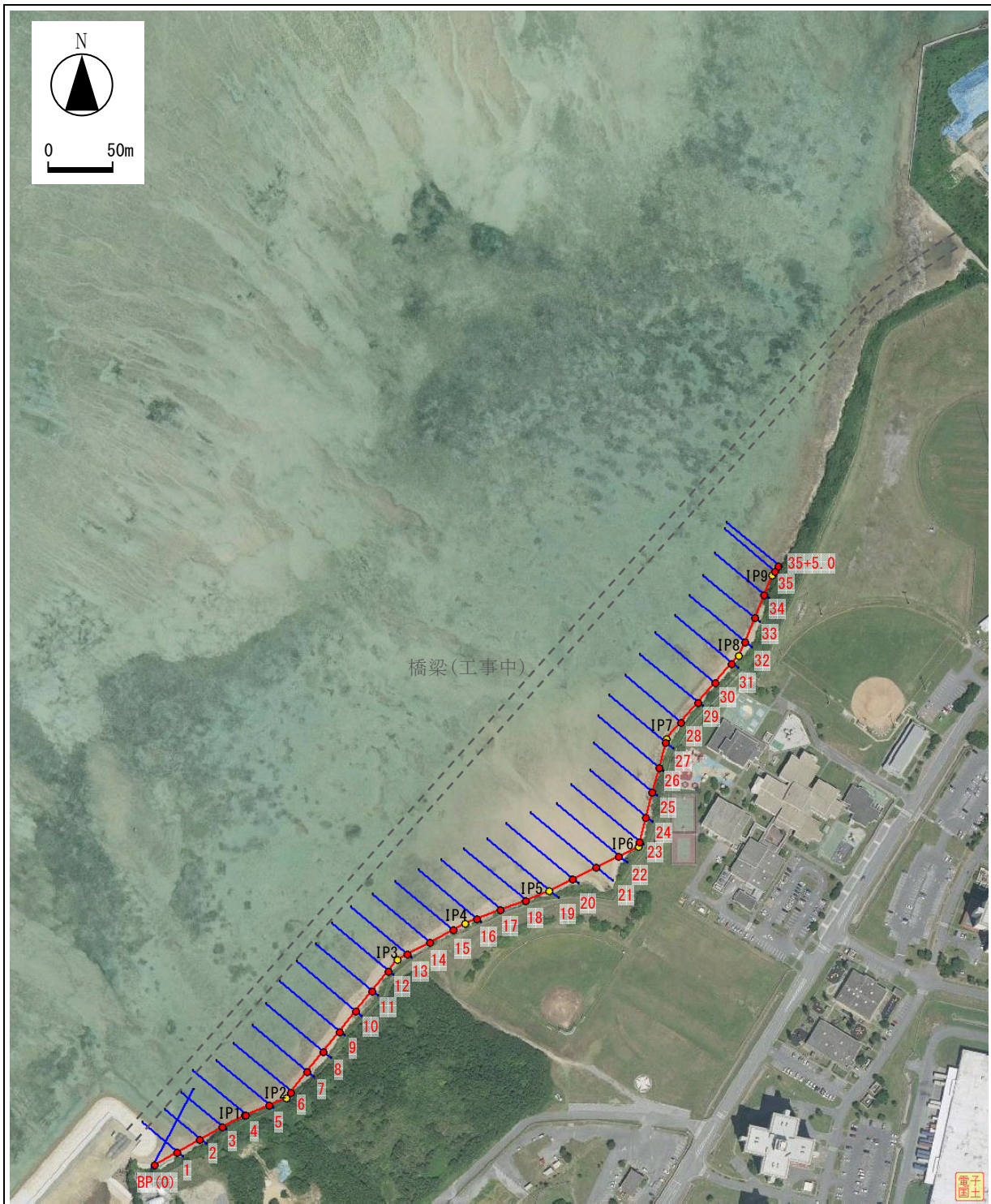


図 3.2.46 既存の現地調査範囲 (地形) (平成 25 年度)





【凡例】

- : 中心線 (縦断測線)
- : 横断測線 注) 各横断側線の長さは調査季により異なる。

図 3.2.47 測量調査における調査位置

イ) 調査結果（平成 25 年度）

(a) 地形の状況

埋立事業実施区域及びその周辺において、干潮時における岩礁の露出状況等について記録した。

調査結果概要は図 3.2.48 に示すとおりである。



図 3.2.48 調査結果概要（地形の状況）

(b) 重要な地形の状況

埋立事業実施区域及びその周辺において、重要な地形として、波食棚、ノッチ及び石切場跡について、分布状況を把握した。

なお、ビーチロックは確認されなかった。

調査結果概要は図 3.2.49 に示すとおりである。

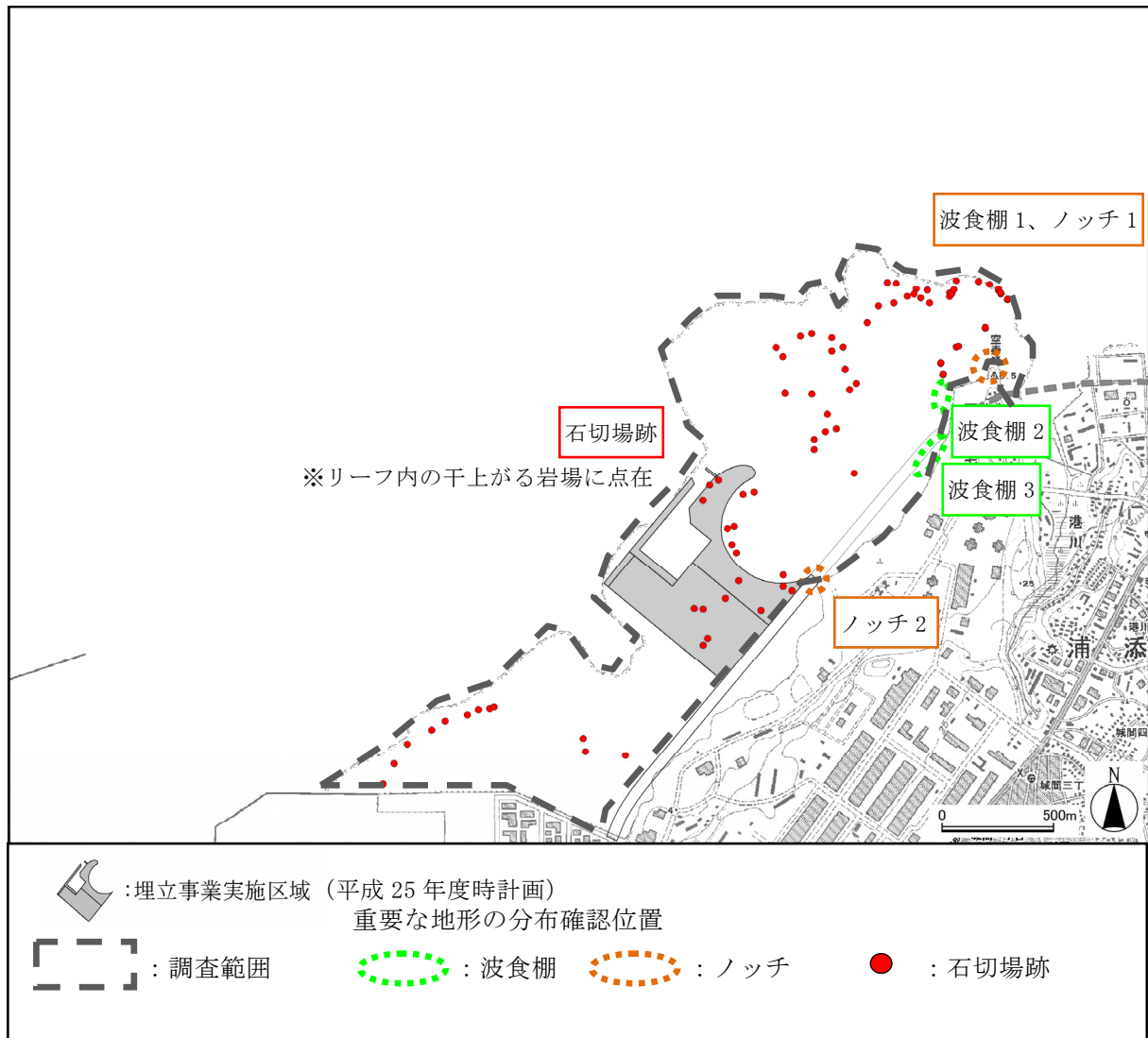


図 3.2.49 調査結果概要 (重要な地形)

(c) 測量調査

測量調査をもとにした地盤高分布 (等高線図) は図 3.2.50 に示すとおりである。



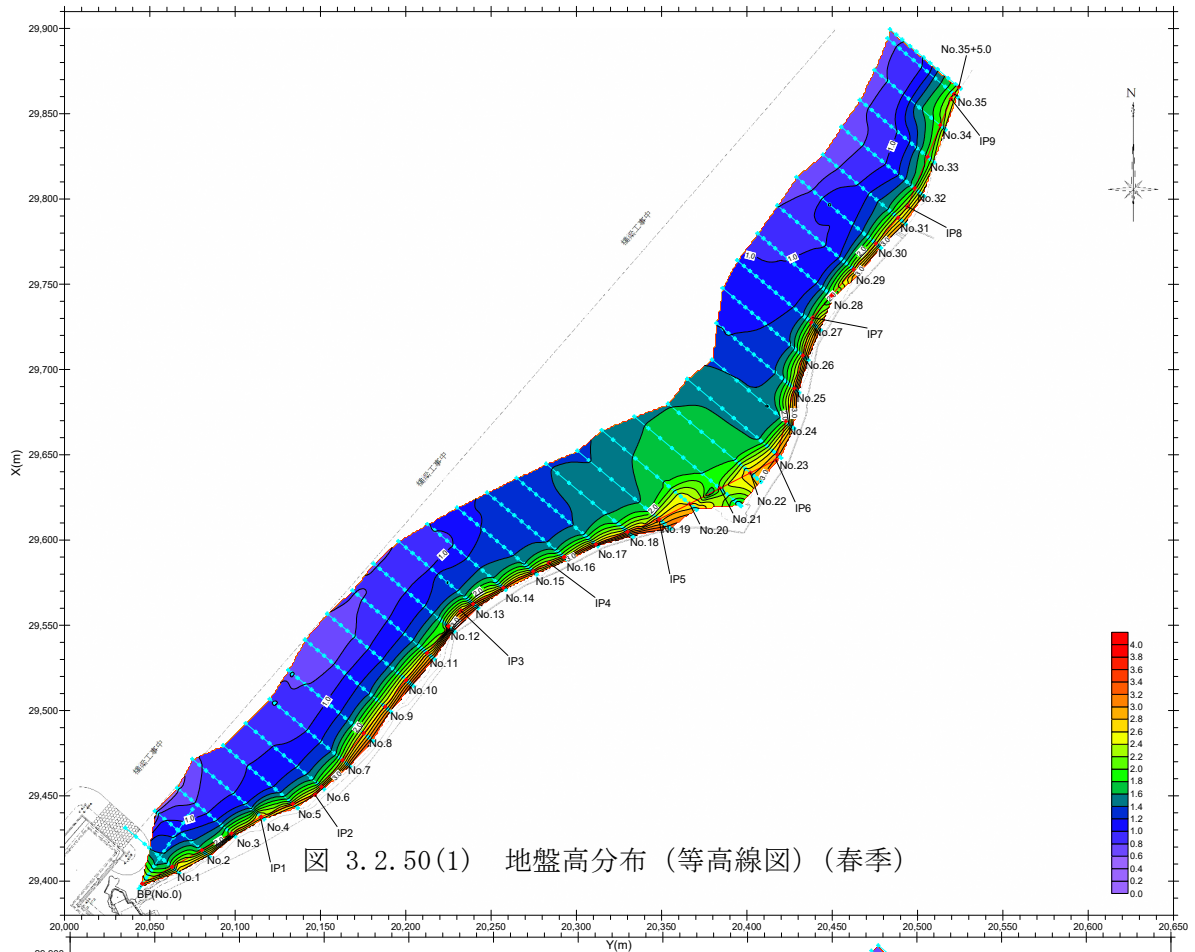


図 3.2.50(1) 地盤高分布 (等高線図) (春季)

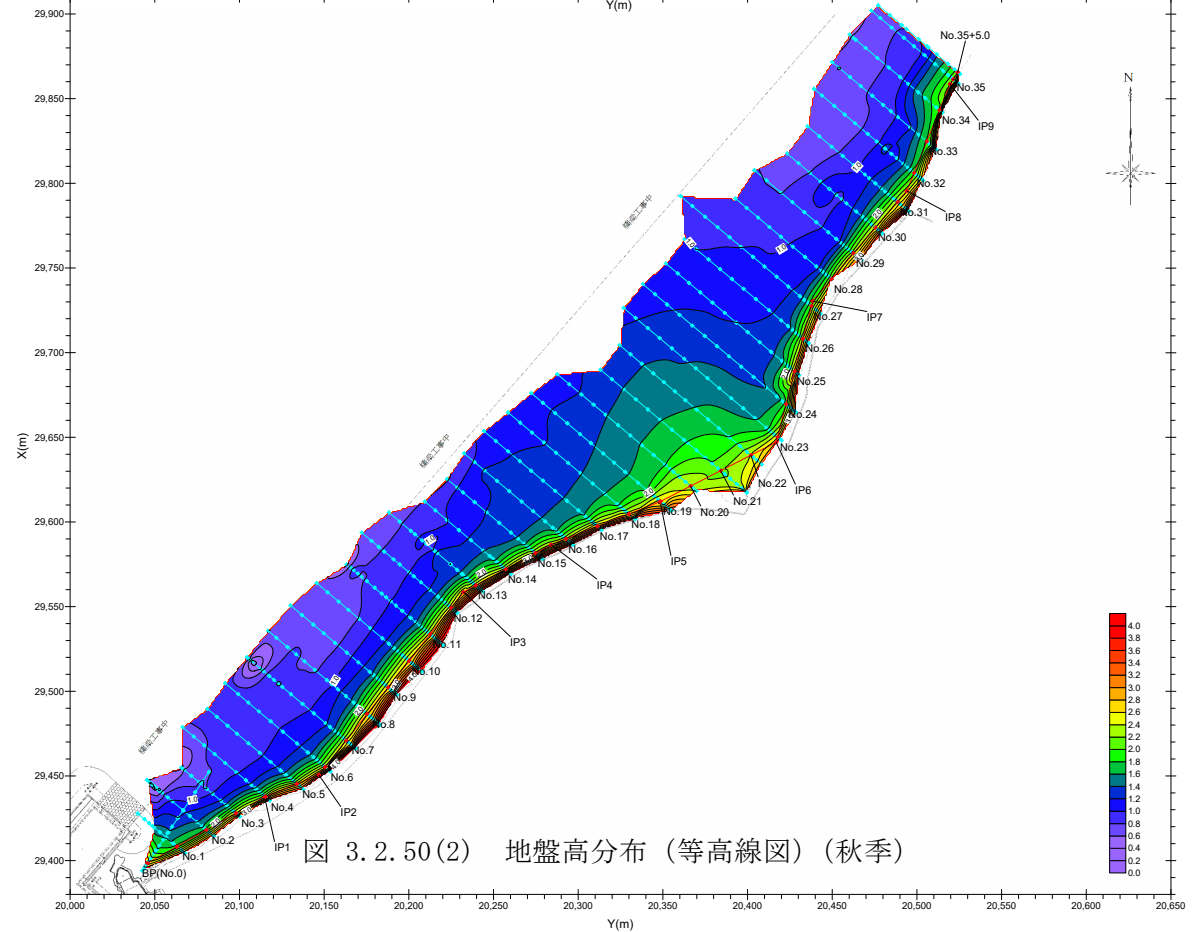


図 3.2.50(2) 地盤高分布 (等高線図) (秋季)

## 2) 土壌及び地盤の状況

### (ア) 文献その他の資料調査

#### ア) 土壌の状況

土壌の分布状況は、図 3.2.51 に示すとおりである。

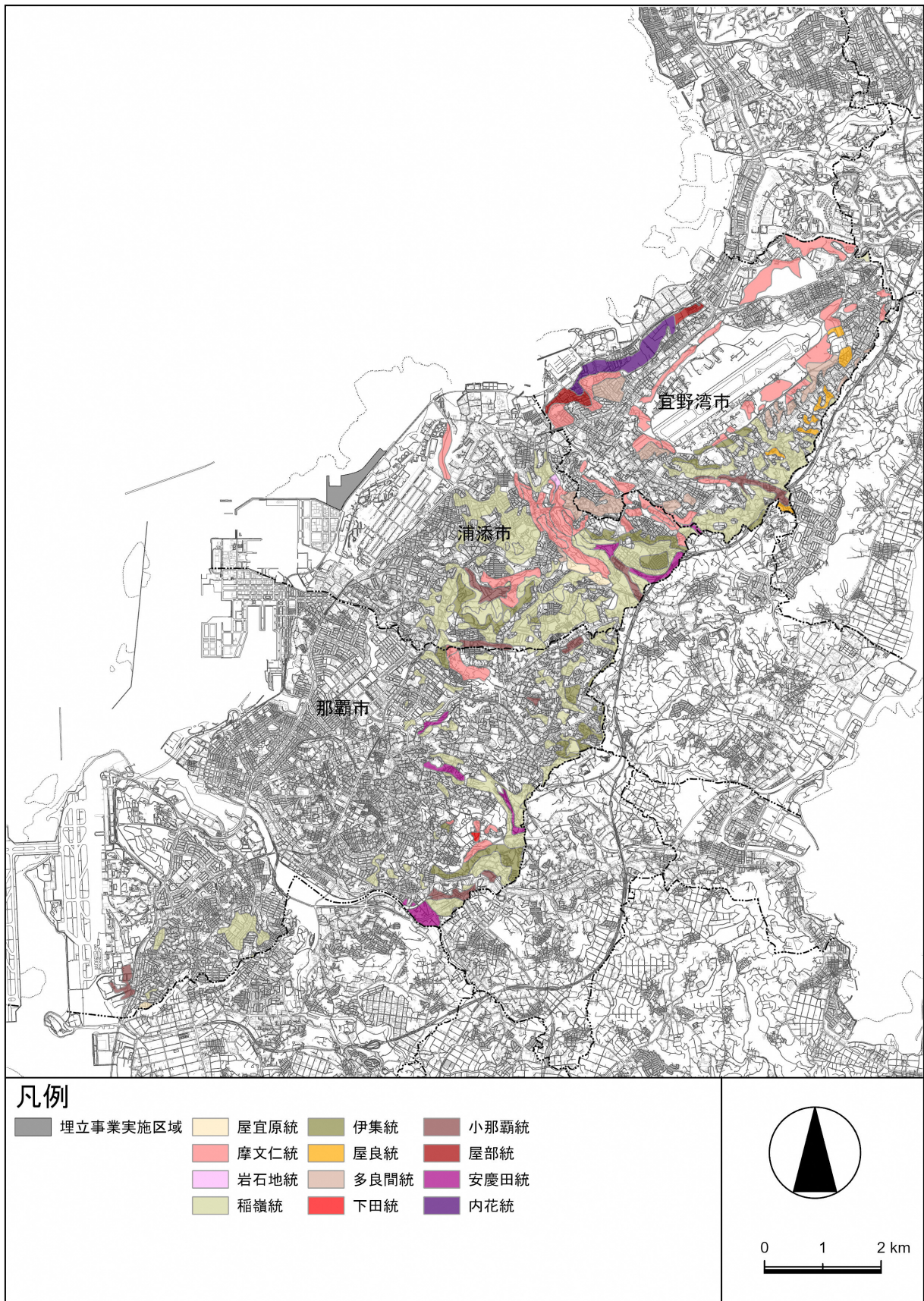
#### イ) 地盤の状況

地盤沈下の原因は、主として地下水の過剰な汲み上げによる地層の収縮とされているが、「環境白書 令和3年度報告」(令和5年3月、沖縄県)によると、沖縄県では、この現象による沈下事例は現在までのところ認められていない。

#### ウ) 土壌汚染の状況

「環境白書 令和3年度報告」(令和5年3月、沖縄県)によると、埋立事業実施区域及びその周辺の土壌汚染についての報告はない。





出典：「土地分類基本調査図(土壤図、沖縄県中南部)」(昭和 58 年、沖縄県企画部)

図 3.2.51 土壤の分布状況